

白居易『新樂府』と軍記物語

——「海漫漫」詩を中心として——

増 田 欣

白氏文集がわが国の中古・中世の歌人や文人にひろく愛読され、その時代の文学に多大の感化を与えてきたということについては、よく喧伝されている。が、藤原定家が白氏文集全十帙のうちの特に第一・第二の帙を詩心涵養のために熟読すべしと推奨したように、すくなくとも中世文学に与えた白氏文集の影響は、その第一・二帙に取められた諷諭詩・閑適詩・感傷詩の影響にほぼ限られているようである。太平記の出典をひろく調査整理された高橋貞一博士が、白居易の作品との関係について、「殆どすべての引用が、卷三、卷四及び長恨歌、琵琶行及び長恨歌伝の内であることは、最も注目すべきことである。」(傍点)と言われたのは、きわめて重要な指摘であり、さらに言えば、ひとり太平記にとどまらず、中世文学全般に通ずる基本的な傾向であろうと思われるのである。長恨歌および長恨歌伝や琵琶行(琵琶引)もいう(は卷十二(第二)に収められており

新樂府の序の末尾には、「元和四年為左拾遺時作」とある。すわなち、白居易が元和三年(八〇八年)に諫官たる左拾遺に任せられたその翌年に作られたもので、同十年に江州の司馬に左遷されるまでの彼の詩業の代表作であり、その序に「愔而言之、為君為臣為民為物為事而作、不為文而作也」と自負するその諷諭精神に、彼の本領の發揮をみとめられてきた作品群である。最近の中国における文化革命の嵐のなかでは、「白居易は、(中)自分と意見の異なる者を攻撃するために、人民の代弁者のフリをしたのであって、封建官吏としての彼は人民の苦痛の製造者であった」というような否定的評価がなされているそうであるが、唐代の政治的社会的権力機構のもとで、これらの諷諭詩を發表して政治や官僚や世相を批判した白居易の、その諫官として自覚の深さに驚嘆せざるをえないのである。

新樂府五十首のうち平家物語(覚一本・延慶本・長)に引用されているのは、

- (1)七德鍾(長・盛)
- (4)海漫漫(上)
- (7)上陽白髮人(上)

卷三・卷四(第一)は新樂府五十首を収めた両巻である。

(9)新豊折臂翁(盛・延) (10)太行路(盛) (11)司天台(上) (13)昆明春水海(覺・延) (17)五絃彈(上) (21)驪宮高(長・盛) (28)入駿園(盛) (31)杜陵叟(長) (33)李夫人(延) (40)井底引銀瓶(覺・延) (43)隋堤柳(盛) (47)天可度(上)などの十五作品である。太平記には、上記の(1)(4)(7)(9)(10)(17)(21)(28)(31)(33)(40)のほかに、(5)立部伎、(8)胡旋女、(12)捕蝗、(14)築塩州、(22)百鍊鏡、(27)園妾を加えた十八作品が引かれている。なお見落しているものもある。また、(7)(10)(17)(21)(28)などは、その一部が和漢朗詠集にも採録されていて、それとの交渉を吟味する必要があるのだが、紙幅の都合で今はそれに立ち入らないことにして、「海漫漫」詩だけを対象に、電記物語におけるその受容のしかたを考察することとする。

二

「海漫漫」詩は、作者自身が「戒・求・仙也」と注しているように、蓬萊山に不死の仙薬を求めて得られなかった秦の始皇や漢の武帝の故事を詠んで、憲宗皇帝が神仙を求めるとを諷諭した作品である。事與、憲宗の神仙欲求は甚しかったらしく、そのために身を滅したくらいである。三田村泰助氏の説明を借りると、

神仙術は仙術による長命法で、秦の始皇以来、英明な君主がかかりやすい迷信である。長生薬と称してあやしげな薬をつくり、これを常服するとたいい毒にあてられ、あげくに発狂状態になるのが常であった。このときも仙人に柳泌りゅうへいというものが現われた。この人物の言によると、浙江の靈場天台山は神

仙があつまるところで、そこには靈草が多いので、憲宗は泌を台州の知事に任命した。臣下がこれを諷めたところ、憲宗は、たった一州の力で君主が長生きできるのであれば、別に物惜しみをする必要もなからうと退けたという。

長生薬の効果はできぬに現われ、憲宗は狂気じみて怒りっぽくなり、側近の宦官はそのために往々にして罪をえて死に、手がつけられない状態になった。そして帝は、一日ぼっくりと死んだ。公表では薬のせいとされたが、実は宦官の王守澄おうしやうてい、陳弘志が帝を弑し、他の宦官が結束して彼らをかばって外部にもらさなかつたのだと伝えられている。

という。白居易は、憲宗弑逆に十二年さきだつ元和四年に「海漫漫」詩を作つたのであるが、旧唐書(憲宗)には、宰相李藩が憲宗の下問に答えて、神仙を求むべきでないことを上奏した記事がある。すなわち、

八月乙巳朔乙亥。上顧問宰相曰、「神仙之事、信乎。」李藩对曰、「神仙之說出於道家、所宗老子五千文為本。老子指婦与姪無異。後代好怪之流、假託老子神仙之說。故秦始王遣方士載童女入海求仙。漢武帝嫁女与方士、求不死藥。二主受惑、卒無所得。文皇帝服胡僧長生藥、遂致暴疾不救。古詩云、『服食求神僊、多為藥所誤。』誠哉、是言。君人者但務求理、四海業推、社稷延永、自然長年也。」

という記事である。この李藩の答申が、道家の老子を始祖と称するのは附会にすぎぬと説き、かつ秦皇、漢武が仙薬を求めた故事を例にあげて求仙を諷めているという二つの点で、「海漫漫」詩と軌を一にしている。白居易の詩は、李藩の答申と骨子を同じくしつつ、そ

れに文学的形象を与えたものとも見うるのであるが、新樂府の自序や旧唐書の記事を信すれば、白居易の詩の方が一年早く成立していたはずである。当時における硬骨の儒者官僚に共通した思考のしかたであったと考えるべきであろうか。

三

平家物語における「海漫漫」詩の引用のしかたを見ると、(1)仙郷を叙述するための引用、(2)懷土望郷の想いを述べるための引用、(3)世間無常の觀念を説くための引用、の三種に分けることができる。以下、それぞれについて詳察していくことにする。

(1)仙郷を叙述するための引用

平家物語卷七(嶋詣)には、兵を挙げた木曾義仲を討とうとして平家の軍勢が北國へ進発したとき、副將軍平経正が琵琶湖中の竹生島に渡り、そこに祀られた明神に詣でて琵琶をかなでるといふ場面がある。その記事のなかで、島の情景をえがいて、次のように述べている。

比は卯月の八日の事なれば、緑にみゆる梢には春のなさけをのこすかとおぼえ、おりしりがほにつげわたる。まことにおもしろかりければ、いそぎ船よりおり、岸にあがって、此嶋の景氣を見給ふに、心も詞もをよばれず。彼秦皇・漢武、或は童男・女をつかはし、或は方士をして不死の薬を尋給ひしに、「蓬萊をみずば、いなや帰らじ」といひて、徒に船のうちにて老、天水茫茫として、求事をえざりけん蓬萊洞の有様も、かくやありけんとぞみえし。(岩波古典文) 学大系本)

この章句は、屋代本や平松家本では卷七の目録に「皇后宮亮経正

竹生嶋參詣(之)事但有別紙」と見えるのみで、本文は載っていない。そして、屋代本には「平家抽書七ヶ条」のなかに記されている。平松家本は卷十二以下が現存しないので不明であるが、おそらく同様の取り扱いであつたらう。増補系とよばれる延慶本や長門本には欠けている。渥見かをる博士は、この章句の諸本による有無や位置の相異なるの点から、この章句は屋代本の成立をあまり遡らないころ語り本系の側で増補されたものであり、屋代本の「平家抽書七ヶ条」が実は平家物語のなから抽出されたものではなくて、逆に平家物語の外の物語として取められたものであろう、と説かれている。源平盛衰記(卷二八、経正竹生)のばあいは、いっそう叙述がゆたかになっており、前掲の覚一本本文の棒線部に相当する部分も、次のようになっている。

海漫漫として直下と見下せば底もなし、雲の波、煙の波に紛つゝ、深水最幽也。昔秦皇・漢武の、不死の薬を探んとて方士を便に遣はして蓬萊を求しに、蓬萊を見ずはいなや帰らじと云ける童男・女、徒に舟の中にあや老にけん。茫茫たる天水、角やと覚て面白や。(有明堂) 文庫本)

秦の始皇が不死の薬を求めた話は史記の始皇本紀や封禪書に、また漢の武帝の話は同じく史記の孝武本紀や封禪書に見えているけれども、上掲の覚一本や盛衰記の文章が白居易の詩の辞句を借りて綴られたものであることは、両者の対応部分を比較すれば一見して明瞭である。

海漫漫

海漫漫たり、

直下無底旁無辺

直下とみおろせば底無し、旁に辺り無し。

雲霧標浪最深処

雲の霧、煙の浪の最深き処に、

人伝中有三神山

山上多生不死藥

服之羽化為天仙

秦皇漢武信此語

方士年年採藥去

蓬萊今古但聞名

天水茫茫無覓処

海漫漫 風浩浩

眼穿不見蓬萊島

不見蓬萊不敢歸

童男艸女舟中老

人伝ふ、中に三の神山有りと。

山の上に多く不死の藥生ひたり、

之を服すれば羽化して天仙と爲る。

秦皇漢武此の語を信じて、

方士をして年々に藥を探りに去る。

蓬萊は今古、但名をのみ聞く、

天水茫茫として覓るに処無し。

海漫漫たり。風浩浩たり。

眼は穿なむとすれども蓬萊の島を見ず。

蓬萊を見ずは敢て歸らじいひし、

童男艸女、舟の中に老いたり。

とにかく平家物語は、琵琶湖の漫々たる水のなかに浮かぶ竹生島を蓬萊島に見たてて情景描写をするために、この詩句を借り用いたにすぎない。しかも、前掲本文に續けて、

或経の中に、「閻浮提のうちに湖あり。其なかに金輪際よりおひ出たる水精輪の山あり。天女すむ所」といへり。則此嶋の事も述べていて、原詩が本来もっていた「被_レ求_レ仙也」という諷諭精神とは何のかかわりもなく、むしろ竹生島を非現実的な理想の地と見たてて、その仙郷ぶりをたたえるために、原詩の辭句を借り用いたと言ふことができる。

(2) 懷土望郷の想いを述べるための引用
平家物語卷三(康頼)には、俊寛らが流された鬼界島の情景が次のごとく述べられている。

二人はおなじ心に、もし熊野に似たる所やあると、嶋のうちを

尋まはるに、或は林塘の妙なるあり、紅錦繡の粧しなじなに、或は雲嶺のあやしきあり碧羅綾の色一つにあらず、山のけしき木のこだちに至るまで、外よりもなを勝れたり。南を望めば、海漫漫として、雲の波煙の浪ぶかく、北をかへりみれば、又山岳の峨々たるより、百尺の瀟水懸落たり。(岩波古典)

成経と康頼の二人は、熊野に似ているこの場所に三所権現を勧請して祈禱するのであるが、上の情景描写は、小野篁の「春生」詩の「著_レイヲ、野ニ展敷ス。紅錦繡、当_レツツハ、天ニ遊織ス。碧羅綾。」(和漢朗詠集卷)の句と「海漫漫」の詩句とから成り立っており、屋代本・平松家本などの語り本系は、本文に異同がない。ところが、増補系諸本では、

加様に心憂所へ被_レ放たる各が身の悲はさる事にて、旧里に残留る父母妻子、此有様を伝聞てもだへこがるらむ心の内、思やられて無慙也。人の思の積こそ怖しけれ。彼海漫漫として風皷々たる雲の浪煙の濤に咆たる、蓬萊方丈瀟湘の三の神山には、不死の藥もあむなれば、末も憑みあるべし。此際摩方白石、あこしき、油黄島には、何事になくさむべきと、被_レ思遣て哀なり。(延慶本第一末。長門同卷)

とあって、絶海の孤島に流された身の悲愁や望郷の想いを表現するために「海漫漫」の詩句が借用されているのであり、しかも、「蓬萊山には不死の藥もあるとのことだから、いつまでも生きながらえて、いずれは故郷へ歸れる当てもあるが、この鬼界島にはそうした慰めとなるものもない」と、孤島の配流の苦しさを強調するために、引き合ひに出しているのであって、原詩のもつ諷諭精神などは全く見捨てられてしまっている。

また、延慶本（第三末、平家福原に）には、福原の都を落ちて海上に浮かんだ平家一門の人々の心情を叙して、

春嵐嵐を破て、翠黛紅顔の粧瀾を叙へ、蒼波に眼を穿て、懐土望郷の涙抑がたし。

（長門本卷一四も同じ。延慶本第六末。）

とあるが、これは、大江朝綱の「翠黛紅顔錦繡粧、粧と、泣尋ニヤ沙窓ヲ出ツテ家郷ヲ」

（和漢朗詠集卷）の詩句と「海漫漫」詩の

「眼穿不見蓬萊島」の句とをなймаせて、「懐土望郷」の切実さを表現したものである。

要するに、「海漫漫」詩の受けいれかたの一つには、絶海の孤島に隔絶されたり、あるいは船の上に余儀なく日をすごしたりして、帰ることを許されぬ家郷を恋い慕うという場面を叙述するばあいの修辭的引用ということがあったのである。

(3) 世間無常の観念を説くための引用

平家物語卷十一（大臣殿）に、捕われて鎌倉へ護送された平宗盛が、同じく捕われの身の子息清宗に対する断ち切れぬ恩愛を嘆き訴えるのに向かつて、或る聖がこれを慰める、そのことばのなかに、次のような文句がある。

たれか嘗めたりし不老不死の薬、誰かたもちたりし東父西母が命、秦の始皇の誓をきはめしも、遂には驪山の墓にうつもれ、

漢の武帝の命をおしみ給ひしも、むなしく杜陵の苔にくちま。

「生あるものは必滅す、釈尊いまだ栴檀の煙をまぬかれ給はず、業尽て悲来る、天人尙五衰の日にあへり」とこそうけ給はれ。

（岩波古典文学大系本。屋代本も）

右の文章は、「海漫漫」詩の前掲部分に続いて、

徐福文成多誕誕

上元太一虚祠禱

君看驪山上杜陵頭 君看よ、驪山の家の上、杜陵の頭を、
畢竟悲風吹墓草 畢竟に悲の風、墓草を吹く。

とある、その内容と、「生アル者、必ず滅ス」云々という大江朝綱の

「四十九日追善願文」（下「無常」）の詞句とから成り立っている。

大意は、東方朔や西王母ほどの長寿を保った人もなく、不老不死の薬を嘗めた者もない、秦の始皇や漢の武帝も結局は死んで驪山や杜陵に葬られた、釈迦や天人とても死をば免かれえない、この

のであり、世間無常を説いて、現世の恩愛に執着する宗盛を訓したものである。

「海漫漫」詩の表現を借り用いながらも、儒教的政教的立場に立って道家の神仙思想を批判した原詩とは異なって、仏教的無常観の表白へと切りかえられているのである。

以上、平家物語における「海漫漫」詩の受容のしかたを三種類に分けて見てきたのであるが、いずれのばあいも、白居易の諷諭精神は全く顧みられていないと言わねばならない。もちろん、原詩における諷諭の対象が「求仙」にあり、そのような批判精神がそのままの形で受けいられるための契機が当時の我が国の社会にはなかった、という点を考慮すべきである。それが、修辭的引用の段階にとどまらせることになったとも言える。ただ見のがしてならないことは、多く即詠集所収の詞句とも結びついて用いられている、その修辭的な機能が、平家物語の唱導文芸的な側面とかかわりあっていると思われることである。

四

太平記卷二十七（始皇求蓬萊事）に引用されている「海漫漫」詩について考察してみよう。

いわゆる親戚の擾亂の起る直前、足利直義の帰依する禪僧妙吉侍者が、「或時、首楞嚴之談義已ニ畢テ、異国本朝之物語ニ及ビケル時」(西海院本)に、秦の始皇と趙高の説話に託して、かねてより宿意をさむ高師直・師泰兄弟の奢修驕慢ぶりを難じ、直義に彼らの誅伐を懲罰したという記事なのであるが、妙吉の語つた中国説話は三千字に近い長さをもっており、作者はこれを史記の始皇本紀にもとづいて書きあげている。始皇本紀は殊に年代記的性格が濃厚で、その記述もきわめて精細である。太平記は、その始皇を中心とする秦の歴史のうち、とりわけ有名な項目、たとえば、儒教の經典を焼いたり、天下の兵器を鑄かして金人十二体を鑄たり、方士に不死の仙薬を求めさせたりした説話などを摘出しつつ、始皇の今生涯と、趙高の二世弑逆、子嬰の趙高誅殺、項羽の子嬰殺害にいたる秦の興亡を要約して綴っている。項目相互の前後関係には原典と異なるばあいもあり、また両者の同文関係はみとめがたいけれども、太平記の取りあげた項目は始皇本紀に記されているものばかりであり、かつ、個々の項目の説話内容も原話から離れることが少なく、両者の対応関係はあざやかに指摘できるのである。

さて、始皇が不死の仙薬を求めた説話の部分は、阿房宮造営の話に続けて、次のように語られている。

其居所ヲ高シ、其歡楽ヲ究給ニ付テモ、只有待之御寿ノ限りアル(ベキ)事ヲ歎キ給シカバ、イカバシテ蓬萊ニアルナル不死之薬ヲ求テ、千秋万歳之宝祚ヲ保ムト思ヒケル処ニ、徐福・文成ト申ケル二人道士来テ、我不死之薬ヲ求ル術ヲ知りタル由申ケル(レバ)、帝限ナク悦給テ、先彼ニ大官ヲ授ケ、大隊ヲ与ヘ給フ、嚙テ彼ガ申旨ニ任テ、年末、過二十五童男艸女六千人

ヲ集メ、龍頭鶴首之舟ニノセテ、蓬萊之島ヲソ求メケル、海漫々トシテ辺モナシ、雲之濃烟之波イト深ク、風皓々トシテ閑ナラズ、月華星彩蒼茫タリ、蓬萊(ハ)今モ古ヘモ只名ノミ聞ケル事ナレバ、天水茫々トシテ求ルニ所ナシ、蓬萊ヲミズハ否ヤ帰ラジト云シ童男艸女ハ、イタツラニ二箇ノ中ニヤ老ヌラン、徐福・文成其偽リノアラハレテ、(責ノ)我身ニ来ラムズル事ヲ恐レテ、是ハイカサマ龍神之崇ヲナスト覚候、皇帝自ら海上ニ幸ナリテ龍神ヲ退治セラレ候ナバ、蓬萊之嶋ヲナドカ尋得ヌ事候ベキト申ケレバ、(カツコ内は支秋本)

右の文章の縁線部が「海漫漫」の詩句をほとんどそのまま載し入れたものであることは、前掲の原詩およびその訓読文と比較すれば一目瞭然である。始皇本紀には、始皇が齊人徐市や燕人盧生や韓終・侯公・石生などに命じて、別々に仙薬を求めさせた記事が出てくるのであるが、太平記と関連のある徐市(徐福)についての記事は、次のごとく二十八年と三十七年とに分割して記されている。

(A) 二十八年〔中略〕齊人徐市等上書曰、「海中有三神山、名曰蓬萊・方丈・瀛洲、僊人居之、請得童男或童女求之、於此是遣徐市・瑯童男女数千人、入海求三僊人」、」

(B) 三十七年〔中略〕方士徐市等入海求神薬、数歳不得、費多、恐譴乃詐曰、「蓬萊薬可得、然常為大蛟魚所吞、故不得至、願請善射」与俱、見則以連弩射之、」

このように九年間の距りをおいて分割記載されている徐市求仙の記事を、太平記は再び統一し、本紀の記述にしたがって、始皇と鮫大魚との闘いの話、始皇病歿の話へと続けたのである。そのため、(A)と(B)のあいだにある記事の多くを削除しており、割愛しかねた説

話、すなわち、

(1) 始皇が、その政治を批判する儒者たちの思想的背骨につちかう儒教の経典をことごとく焼き捨てた話(三十四年)

(2) 天から降った大石に秦の滅亡を予告する刻文があったので、人のしわざにちがいないと激怒した始皇が、方十里の人民を殺戮した話(三十六年)

の二項目を、徐市求仙の話の前へ持ってこなければならなくなつた。これが、史記と太平記とのあいだで叙述順序が相異している理由である。また、史記における徐市求仙の記事は、上に見たようにきわめて簡単であるから、太平記作者は、この部分を白居易の詩にもとづいて叙したのであるが、その際に原詩を誤解して、漢の武帝の時の方士である文成(齊人小翁)をも、始皇時代の人物としてしまったのである。

太平記は、観応の擾乱の直接の原因として足利氏の一族である上杉重能・畠山直宗や直義に親昵する妙吉が將軍の執事である高師直・師察兄弟の威勢を嫉み憎んで直義に讒言したことをあげている。作者は、師直兄弟の横暴ぶりを批判的に叙述(卷二七、師直究駢)したあと、これを直義に讒言する上杉・畠山に対しては、邦家の安泰のために廉頗との争いを怯者のごとく避けた蘭相如の説話を掲げ所として批判(同、廉頗蘭相如事)し、また、妙吉をして趙高専横の説話を掲げ所に師直兄弟の振舞いを非難せしめておいて、一方では妙吉の増上慢ぶりを述べて批判する(卷二五、大塔宮亡靈宿胎内)といふぐあいである。一見、錯雑とみえる太平記のこうした叙述ぶりが、歴史の方向を見うしなつた作者の八つ当たりので平板な批判性と非難されたりもするところなのであるが、むしろ、作者がきわめて意図

的に試みた歴史評論の方法として考慮すべき問題なのである。

ところで、上に述べたような歴史評論の方法にもとづいて挿入されている始皇・趙高の説話の、そのまた一部分に引用された「海漫漫」詩にすぎないのであるから、この例だけをもって、白居易の諷諭詩と太平記作者の批判精神の影響関係を論ずることは、適当ではあるまい。両者の関係の親密なことについて、すでに齋藤慎一氏も評論されていることであるが、本稿では、次の二点を指摘するにとどめておきたい。

その一つは、先に考察したごとき平家物語の、詠嘆的な情調をただよわせた、唱導的な語り口を思わせる修辭的引用と比較して、太平記のばあいには、その説話内容に重点がおかれて、間接的ながらも作者の歴史批判にかかわっているということである。

そして他の一つは、作者が特に取りあげた始皇の事蹟は、「皆焼捨ラレケルコソ淺増ケレ」、「加様の悪行、人單ニタガヒ、天ニ背キケルニヤ」、「皆首ヲ刎ラレケルコソ不便ナレ」のごとく、いずれも否定的に扱われており、「始皇帝ノ御政ノ治ラデ、民ヲモアワレマズ、仁義ヲ専ニシ給ハヌ事」の例証として持ち出されているのであるが、過去の異国の皇帝を悪逆の王として形象することで為政の道のあるべき姿を暗示する、このような太平記作者の方法のなかに、白居易の諷諭詩の方法と相通するものが見いだされるということである。太平記作者が、妙吉の口を通してではあるが高師直兄弟の専横を批判するための掲げ所とした始皇・趙高の説話のなかで、当面の批判とは別に為政者をも諷するといふ、いわば批判の二重構造は、他の挿入説話の多くにも共通して見いだされる性格なのである。

- 注1 『詠歌大概』・『毎月抄』および二条良基『九州問答』
- 2 高橋貞一博士「太平記の出兵に関する研究」(西京高校研究紀要、昭34・8)
- 3 朝日新聞(昭41・7・30朝刊)の「文化」欄に紹介された『光明日報』の「文化遺産」欄の記事
- 4 三田村泰助氏『宦官』(第四章、女禍と宦官)中公新書
- 5 「海漫漫」詩の末尾(後出「畢竟悲風吹墓草」の句の次)にも、「何_(ラモ)況_(ラモ)シヤ玄元聖祖ノ五千言(ニモ)、不_(ラモ)レ言_(ラモ)ハ_(ラモ)藥_(ラモ)トモ_(ラモ)不_(ラモ)レ言_(ラモ)ハ_(ラモ)仙_(ラモ)トモ、亦不_(ラモ)レ言_(ラモ)ハ_(ラモ)白日ニ昇_(ラモ)ルトモ青天ニ」とある。
- 6 渥見かざる博士『平家物語の基礎的研究』(第四章、平家物語の詞章展開)
- 7 訓説文は、小松茂美博士『平安朝伝来の白氏文集と三蹟の研究』(資料編)を参考にした。
- 8 平家物語におけるこの詩句の訓説は、「和田方吉博士旧蔵『永享八年三月中旬(上巻)』『永享八年丙辰五月四日(下巻)』の識語をもつ点本(永享本)の訓によることをたてまえ」とする岩波古興文学大系本(川口久雄氏校注)とほとんど一致する。
- 9 封禪書に見える徐市の記事は、本紀のように分割されていないが、封禪書から太平記のような始皇・趙高説話を構成することとは不可能である。
- 10 斎藤慎一氏「太平記における白氏文集の撰取」(言語と文化、昭35・1)

—富山大学助教授—